

平成18年度「赤十字と看護・介護に関する研究」助成金
「日本赤十字社における災害看護学の構築と教育方法の検討」

報告資料

平成19年5月15日

日本赤十字九州国際看護大学
山本捷子 谷岸悦子

研究テーマ

日本赤十字社における災害看護学の構築と教育方法の検討

報告資料の作成にあたり

看護基礎教育において災害看護学の習得が必須となってきたが、科目としての設定は、各大学で様々であり、模索している状況である。日本赤十字社では、救護看護師の育成がその使命にあることより、日本赤十字学園でも平成16(2004)年から「赤十字看護大学・短大における赤十字教育に関する検討会」が開催され、翌年10月には報告書が出された。赤十字科目の位置づけを明確化し、災害看護学についても充実に向けての方策・提案がなされた。しかし、赤十字の災害看護(救護)の教育の教材として系統だったものは不十分で、経験と散在している資料に頼っている現状である。しかも、災害救護の現場で活動する看護者に求められる能力は何であるか、どのような教育方法が適切であるかについて明確に示した研究報告は少ない。

今回は、災害時に看護活動を行動化するための能力を既存の文献や資料から抽出することを目的とした。また、この能力の育成を目指した看護基礎教育における災害看護学の授業の展開方法(講義資料を含む)を試案したので、報告する。

尚、授業の展開方法については、学習者である看護大学生の反応や学習成果を踏まえ、検討中である。

平成19年5月15日

I.文献研究

「災害看護に関する看護者に必要とされる能力」

はじめに

「災害看護学の構築と教育方法の開発」のために、災害看護に関わる看護者に必要とされる能力は何かを、既存の文献や資料から抽出した。しかし、災害看護に関わる「看護者に必要とされる能力」を具体的に研究した報告は少なく（久保、2006・黒田、2006・斉藤、2004）、教育目標や教授内容（山本あい子、2005、赤十字看護大学・短大における赤十字教育に関する検討委員会、平成17年・小原、2005）、そして実践評価（高岸、2006・川島、2005）から推測せざるを得なかった。

本研究の目的は、災害時に看護活動を行動化するための能力を既存の文献や資料から明らかにすることである。

1. 収集した文献の概要

文献は、医学中央雑誌・CiNiiで、“災害” “看護” “能力” をキーワードに1996年～2006年11年間を検索し、そのうち災害看護に必要な能力を読み取れるものを今回の文献検討の資料とした。また、災害救援・災害医療に関する人材育成および救援者に求められる能力として、特定の職種に限定していないものや看護職について触れているものも取り上げた。

文献の種類は、看護関連では原著論文は少なく（山本あい子、2005・小原、2000・井上、2006・尾山、1999・尾山、1998）、報告・資料・事例報告が多かった。また会議録、解説で災害看護教育への提言や課題を述べるものも資料として用いた。出典は、学会誌（日本災害看護学会誌、日本赤十字看護学会誌、日本集団災害医学会誌）、紀要（日赤関連・その他）、雑誌（看護、INR、看護教育、看護研究、看護管理）、単行本（「災害看護一人間の生命と生活を守る」、「国際災害看護マニュアル」）、赤十字災害看護研究会編「赤十字災害看護学概要」等である。いずれも、1996年以後2007年までに発行されたものであった。

2. 看護者に必要とされる能力

災害看護は、「災害に対する看護独自の知識や技術を体系的に、かつ柔軟に用いるとともに、他の専門分野と協力して、災害の及ぼす生命や健康生活への被害を極力少なくするための活動を展開すること（南、1996）」であるといわれる。また、災害は、いつどのように起きるかが予測できず、また、刻々と変化する状況に直面していくことが求められる。したがって、知力、技術力、人間性の側面で常に＜変化する状況に対応できる力＞が求められる（黒田、2006）。それらの能力の要素をみると、1）災害に対する知識、2）技術の習得と実践、3）変化への対応、4）他分野との協力、5）活動の展開、6）人間性（対人関係・人間愛）に基づいているといえる。

また、災害看護に対する病院勤務の看護師への意識調査（西上、2000）からは、医療施設のみならず、地域生活者およびその家族の生活を理解し、看護職として法的に責任のある行動をとるために、＜問題解決＞ができる基礎的能力（Evidence Based Nursing）をあげ、1）看護婦が備えるべき災害看護の＜技術＞と2）専門職として＜自覚すべき看護婦のあり方＞や＜セルフコントロール能力＞に分類している。

これらがどのような視点で抽出できるかを、他の文献で検討した結果を以下に述べる。

判断力と意思決定の能力を、＜アセスメント能力＞にまとめている研究報告がある（久保、2006）。ここでは、避難所生活者を対象にした救護者の能力を、＜情報収集力＞、＜災害現場や避難所を推測する力＞、＜環境の影響を判断する力＞を挙げている。

また、国外における日赤看護婦の救護活動の実態と課題（山本捷子、2000）の中でも被災地・難民キャンプの特殊性への対応として、＜被災地・キャンプの状況をアセスメントする能力＞をあげていた。

災害時の特有な技術として、1）トリアージ、2）心肺蘇生法、3）応急処置、4）救護所設置、5）搬送を挙げている（黒田、2006）。国外での救護活動の報告のまとめをみると、直接ケ

アとして外科処置は、包帯交換だけでなく創傷の切開・縫合も看護師の仕事となり、国内では医療行為とされる6) 外科的な創傷手当の技術も必要となることが指摘されている(山本捷子、2000)。

災害看護は、日常性から非日常性の意識の変換とまた非日常性から日常性へと意識を切り替え、一連の災害サイクルを意識して実践しなければならないという観点で見ると、その時期・その場で被災者の生活の視点に立って解決すべき課題を明確にし、対象(個人・家族・集団・地域)にケアを提供し、〈関連機関・他職種との連携をとった体制づくりをする能力〉が必要とされる。また、〈看護職および組織内外の役割と責任を自覚〉し、全体との関係性の中で、〈自己をコントロールする〉能力も重要である。救護者の自己認識とストレス対処能力は、避難所や難民キャンプでの看護の体験からも、挙げられる(久保、2006・尾山、1998)。

さらに、看護職としては、被災者への援助とともに自分を含む救護者への援助も視野にいれて活動することが欠かせない。対象者との関係性のあり方は、共感や対象者に寄り添うことである。この能力を、被災看護師と支援者である看護師の役割と心理的な相違を研究した報告(酒井、2002)では、〈共感や対象者に寄り添う対人関係能力〉、〈人間愛〉であるとして〈人間性〉と表現している。

救護活動を通しての感想(川島、2005)の「医療的問題になる前に、生活環境、人的環境などあらゆる面での調整が重要となる」という言葉は、看護の役割と責任の一つとして、対象の〈生活を見る力〉を指摘するものであり、災害時の看護として力を発揮するところを示すものである。また、筆者らが行ったこころのケアに携わった看護師へのインタビュー調査の中で、こころのケア(何らかの関り、サポート等)を必要と判断するきっかけは何かと聞いた時の答えに、「あれ、と思った」「何か引かかる」「目につく」「気にかかる」というものがあった。また、この感覚は、日常の看護業務中にもあり、多くの患者がいる外来待合室で、「早く対応したほうがよい」と思うのと同じであるという。つまり、看護師個々の素質としての〈感性〉も重要な要素である。〈人間性〉〈生活を見る力〉〈感性〉という能力は、個人の資質として捉えられ、災害時の看護活動を行動化する動機、きっかけとなる点では、その他の能力を発揮する、揺り動かすための基盤となる能力ともいえると考ええる。

さらに、こころのケアの視点からの報告書(斉藤、2004)では、災害時のこころのケアについて認識を深め、被災者へのこころのケアについての〈知識〉と〈技術〉を身につけることとともに、悲惨な現場と不十分な医療環境や生活環境の中で、ストレスに押しつぶされないためにも〈自分自身のメンタルヘルスについての知識と対処方法〉を身につけていくことが大切であり、看護職は被災者のみならず救護班のこころのケアという視点を持って救護活動をする。そのために必要な力として、〈コミュニケーション(傾聴・声かけ、タッチングなど)〉や〈人材や社会資源を利用していく力〉が必要である。

3. 基礎教育で習得する能力と卒後教育で習得する能力

災害時に看護職として活動するための能力の習得は、単純なものではない。それは、「災害」自体の特性にある。災害は、いつ、どこで、どのように起こるか予測がつかないこと、災害時の看護の対象は、全てのライフステージ・健康レベルであること、そして看護の活動の場は、病院施設に限らず、地域社会・国内外にあるということである。また、被災状況は、刻々と変化して、様々な状況を生み出していく。さらに、被災者、救護者、被災者であり救護者であるなど、状況は絡みあっている。このような多様性、複雑性のなかにあって、状況判断をして適切な看護活動をすることが要求されるのである。災害看護に独自の知識、技術もあるが、日頃の看護活動での力の総合・統合が必要である。そのために、災害看護に関する必要とされる能力習得のためには、看護基礎教育、現任教育(スタッフ・看護管理者)、大学院教育の各レベルでの段階を示した取り組みが重要である(山本あい子、2005・川島、2005・小原、2005)。

1) 看護基礎教育課程の目標の検討では、卒業後に災害看護を実践するための基礎的能力または指導のもとに実践できる能力を身につけることが示され、教育内容の多くが災害看護に関する知識の理解であった。

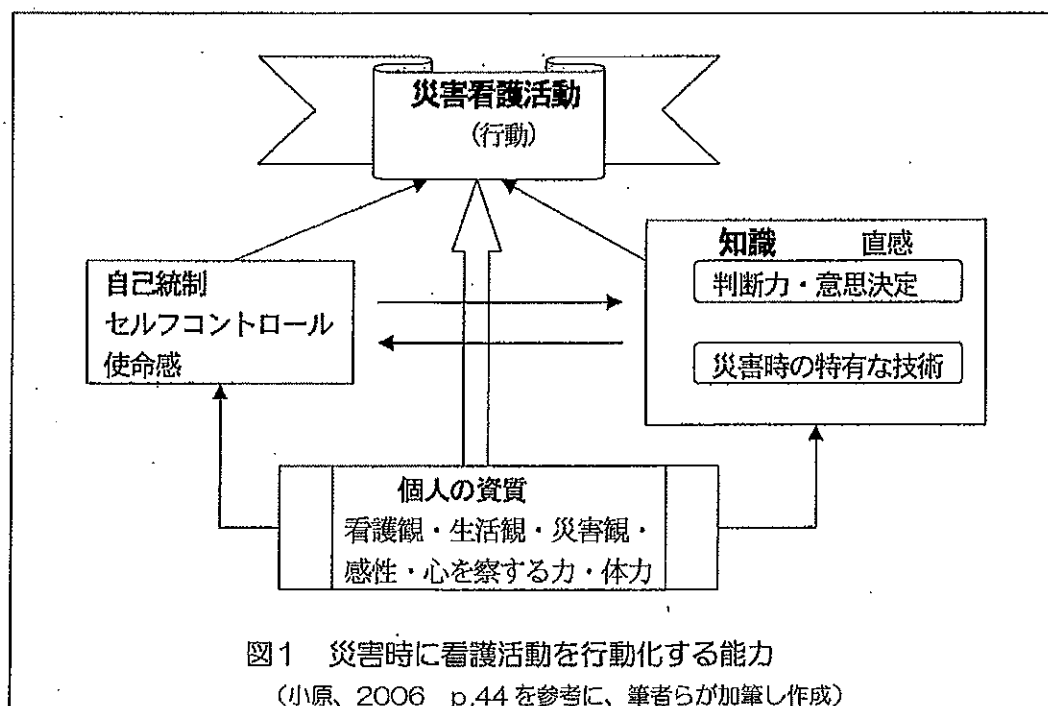
2) 現任教育の目標の検討(山本あい子, 2005)では、スタッフは看護ケアの提供、管理職は組織内外の資源の調整、体制づくりと教育であり、(3) 大学院では高度な看護技術、リーダーシップの能力と、職位レベルでカテゴライズされている。

実践報告の中から、(4) 管理職に必要な組織内外の資源の活用と体制づくりは、課題を自らの役割と全体の関係性のなかから見出す(川島, 2005)という、＜救護機関間、被災者・地域という広い視点で捉える能力＞の必要性も示されていた。

これらの目標をもって、どのような教育方法で能力の育成をするかが、次の課題である。災害看護に特有の知識・技術もあるが、対象を見る目、看護の必要を判断する力は、日頃の看護実践(訓練)の中で育成されているものである。その一方で、災害看護に必要な能力は、経験的に、偶然性によるのではなく、意識化した体系の中での教育が必要であり、体験したことの意味を明らかにし、根拠ある看護として実践していくことが必要である。

4. 結論

文献検討から災害看護に必要な能力を集約すると「災害時に看護活動を実行化する能力」と言える。災害看護に必要とされる能力の要素は、(1)判断力と意思決定、(2)災害時の特有な技術、(3)人間関係の形成 (4)自己調整・セルフコントロール、(5)マネージメント能力、(6)役割認識/使命感/自発的援助行為である。また、行動につながる能力として、＜的確な判断・意思決定＞、救護活動に必要な判断の基となる＜知識＞、行動のための＜救護技術＞、そして＜心構えと態度＞が必要である(小原, 2005)。これらの能力の関係は、図1に示すとおり、災害看護活動を実践する＝行動化に繋げるためには、一つでも欠けることができない能力である。一つ一つの能力の質と量とともに、個人の資質である看護観、生活観、災害観、感性等が各能力を支え、災害時の看護活動の質にも大きく影響してくる(図1)。



今回使用した活動報告書は、同じ災害に救護に関わっていても、時期、場所が異なること、表現様々であることで、その意味の確認が必要である。しかし、今回の分析では、報告者へのインタビュー・確認までに至らなかったため、解釈が不十分に終わっているものがある。この点の確認をすすめデータとしての妥当性・信頼性を高めていく必要がある。また、今回、抽出した災害看護に必要な能力をより具体的に示して、これらの検証をしていくことが、今後の課題である。

【参考文献】

- 1) 久保恭子・小原真理子・酒井明子・他：避難所における救護活動に必要な看護アセスメント能力の分析 共立女子短期大学紀要 第1号 pp.9-14 2006
- 2) 黒田裕子・酒井明子監修：災害看護 人間の生命と生活を守る メディカ出版 2006
- 3) 斎藤和樹・前田潤：「こころのケア」を取り入れた赤十字災害救護訓練構築のための予備的研究 日本赤十字秋田短期大学紀要 第9号 pp.47-52 2004
- 4) 山本あい子・増野園恵・津田万寿美・中西睦子・他：災害看護教育プログラムの開発―災害看護教育内容の抽出とカリキュラム構築― 日本災害看護学会誌 Vol.6 No.3 pp.15-29 2005
- 5) 赤十字看護大学・短大における赤十字教育に関する検討会：「赤十字看護大学・短大における赤十字教育に関する検討会」報告書 平成17年5月18日
- 6) 小原真理子：日本赤十字社における災害看護教育 特色ある教育実践 インターナショナルナーシングレビュー Vol.28 No.3 pp.113-119 2005
- 7) 高岸壽美：新潟県中越地震における日本赤十字社のこころのケア活動 小千谷市でのこころのケア活動の実際 看護管理 Vol.15 No.4 pp.314-317 2005
- 8) 川島真理：被災1週間後の救護 こころのケア活動を通して 看護管理 Vol.15 No.4 pp.318-323 2005
- 9) 小原真理子：看護基礎教育における災害救護訓練の効果―参加した学生のアンケートより― 日本集団災害医学会誌 Vol.4 No.2 pp.126-132 2000
- 10) 井上みゆき・加個正子・片田範子・勝田仁美・他：子どもが入院している病棟の災害時看護―新潟県中越地震の看護師体験から― 日本災害看護学会誌 Vol.8 No.2 pp.8-19 2006
- 11) 尾山とし子・金井悦子・小原真理子・他：災害看護学確立に向けての基礎的研究―赤十字看護婦の国内災害救護活動状況― 日本赤十字武蔵野短期大学紀要 第12号 pp.39-44 1999
- 12) 尾山とし子：国際救援派遣要員の精神的諸問題とその対応 日本赤十字武蔵野短期大学紀要 第11号 pp.89-100 1998
- 13) 南裕子：災害看護学の確立に向けて 看護 Vol.48 No.5 p.87 1996
- 14) 西上あゆみ 末原紀美代：病院看護婦への質問紙からみた災害看護に関する課題 日本災害看護学会誌 Vol.2 No.1 pp.34-44 2000
- 15) 山本捷子・今井家子・小原真理子・他：国外における日赤看護婦の救護活動の実態と課題―救護活動報告書のまとめから― 日本災害看護学会 Vol.2 No.4 pp.28-33 2000
- 16) 酒井明子：被災地内看護師と被災地外看護師の災害体験の比較 日本災害看護学会誌 Vol.4 No.1 pp.61-73 2002
- 17) 平野美樹子：看護基礎教育における人道に基づく援助行動促進への試み―新入生の赤十字トレーニングセンターにおける援助動機・援助行動・自尊感情の変化― 日本災害看護学会誌 Vol.3 No.1 pp.33-44 2001
- 18) 小原真理子：赤十字救護活動や地域防災活動との協働から学ぶ災害看護教育 日本赤十字看護学会誌

Vol.6 No.1 pp.44-45 2006

- 19) 赤十字災害看護研究会 代表金井悦子; 赤十字災害看護概要・平成10,11,12年度伊藤・有馬記念基金教育・研究助成金 研究報告書 平成13年3月13日
- 20) 金井悦子・山本捷子; 21世紀の日本赤十字看護教育への提言―災害看護学の確立に向けて― 日本赤十字武蔵野短期大学紀要 第10号 pp.25-33 1997
- 21) 山本保博・三浦規監修; 国際災害看護マニュアル 真興交易医書出版部 2000
- 22) 山本捷子; 災害看護の歴史 インターナショナルナーシングレビュー Vol.28 No.3 pp.24-27 2005
- 23) 渡辺智恵、白井千津、仁平雅子、浦田喜久子; 阪神・淡路大震災後4年を迎えた看護管理者の抱えている課題神戸市看護大学紀要 Vol.4 pp.31-38 2000
- 24) 小坂保子; ; 昨年の災害を経験して 見附市における豪雨災害と新潟県中越地震に関する報告 2度の災害を経験して 訪問介護と看護 Vol.10 No.2 pp.95-101 2005
- 25) 大和田恭子; 昨年の災害を経験して 新潟県中越地震 ある看護師の小千谷での3日間 災害直後の救護活動で感じた課題と学び 訪問看護と介護 Vol.10 No.2 pp.90-94 2005
- 26) 村松芳幸; プライマリ・ケアと心身医療 心身医 第45巻 第4号 p.263 2005
- 27) 荒木憲一; 被災者に対する心理的支援の基本的態度 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要 第4巻1号 pp.29-34 2006
- 28) 平野美樹子; OSCEを採用した災害看護演習と災害看護教育確立へ向けての課題 日本赤十字看護学会誌 Vol.6 No.1 pp.43 2006
- 29) 高岸壽美; 日赤災害救護の現任教育 ブロック支部の演習と『こころのケア』研修 日本赤十字看護学会誌 Vol.6 No.1 pp.45-46 2006
- 30) Andrea Jje3nnings-sanders, Noreen Frisch; Nursing Student' s perceptions about Disaster Nursing Disaster Management & Response/Jennings -Sanders, Frisch, and Wing Vol.3 No.3 pp.80-85 2005
海外研究開発レポート 災害看護に関連する諸研究 ハイティックリサーチ
- 31) 山崎達枝; 「災害時の救護活動と平時の災害対策」 日本災害看護学会誌 Vol.2 No.1 pp.10-15 2000
- 32) 槇島敏治; 日本赤十字社の有珠山噴火非難者に対する心理的支援プログラム 日本集団災害医学会誌 Vol.6 No.1 pp.31-36 2001
- 33) 小野聡枝・横溝由佳・大竹ひろ子・他; 地域とともに取り組む在宅療養者の防災対策 訪問介護と看護 Vol.10 No.2 pp.115-119 2005
- 34) 高橋弥生; 医療ニーズの高い在宅療養者への防災対策 訪問介護と看護 Vol.10 No.2 pp.124-128 2005
- 35) 白井千津; 災害と看護 臨床看護 Vol.31 No.7 pp.1093-1099 2005

【資料】

1 文献の種類

	原著論文	研究報告	事例報告	総説・解説	単本	計
総数	5	11	8	6	2	32
赤十字の活動を 扱うもの	3	9	3	2	0	17

2 扱っているテーマの分類

研究・報告書の目的やまとめから、どのような視点から「災害看護」「災害救援」の問題や課題を捉えているかを分類した（重複あり）

項 目		実践報告	調査	文献検討	国内	国外	計
看護基礎教育	教育カリキュラム			3	3		11
	教育方法		2	2	4		
	教育評価	1	2		3		
	学生の意識		1			1	
卒業後教育	教育カリキュラム	1		1	2		5
	教育方法	1			1		
	評価	1			1		
大学院教育				1	1		5
災害看護活動	災害看護の姿	3	2	2	6	1	20
	活動内容・方法	3	1		4		
	活動体制・システム	1	1		2		
	他機関・領域連携		1		1		
	看護師の意識		1		1		
	看護師の役割		1		1		
こころのケア		1	4		4	1	20
防災教育	専門職	3				3	4
	地域・地域住民	1			1		

